

## 2017 年度 日本建築学会賞（論文）

### 「わが国の住宅の近代化に関する一連の歴史研究」について

内田 青蔵

#### Studies on the history of modernization in Japanese housing

Seizo UCHIDA\*

#### 1 はじめに

2017 年度の日本建築学会賞（論文）を受賞したので、ここにその受賞した研究内容について紹介したい。

私は、これまで学会賞としては、2004 年度に日本生活学会から著書『同潤会に学べるその思想とデザイン』（王国社 2004 年）で学会賞となる今和次郎賞、2012 年度には日本生活文化史学会から著書『お屋敷拝見』（河出書房新社 2003 年）『学び舎拝見』（河出書房新社 2007 年）『お屋敷散歩』（河出書房新社 2010）の 3 つの著作で日本生活文化史学会賞を受賞している。今回は、ようやく本来の専門学会である日本建築学会からの受賞となる。ちなみに、日本建築学会からは学会賞以前の 1994 年に日本建築学会奨励賞を受賞している。

今回受賞した具体的な研究テーマは、「わが国の住宅の近代化に関する一連の歴史研究—Studies on the history of modernization in Japanese housing」である。このテーマからわかるように、受賞した研究はある特定の研究で得たものではなく、卒論以来これまで手掛けてきた様々な研究をひとくくりとし、それらを一連の日本住宅の近代化に関する歴史研究として評価されたものである。そのため、単純に研究内容を解説することは難しいが、あえて整理すれば、以下のように言えるであろう。

すなわち、私の行ってきたわが国の住宅の近代化に関する一連の研究は、それまでの近代日本住宅の歴史研究では表層的な影響として軽視されてきた“洋風化”現象に焦点を据え、また、生活の洋風化に伴う動きとして住宅の変化を捉えるという考え方をもとに、戦前期のわが国の住宅の変容過程を論じたものである。その結果、それまでとは異なる生活の変化に基づいた新しい近代日本住宅の歴史を提示しているといえよう。

この生活の“洋風化”現象を捉えるため、私は研究対象として戦前期の生活の洋風化のために住宅の改良をめざしていた住宅改良運

動を牽引した「住宅改良会」とアメリカ住宅を理想的住宅としてわが国にその普及を推し進めた住宅専門会社「あめりか屋」を取り上げ、洋風化に関する運動の動きとともに戦前期の住宅の動向とその変容過程を明らかにした。そして、洋風化の影響により誕生した住宅として、これまで明らかにされていた中廊下形住宅に代表される伝統的住宅に洋風要素を取り入れることにより誕生した住宅とともに、欧米住宅に伝統的住宅の要素を採り入れることにより誕生した住宅があり、後者を「洋風系独立住宅」と称して前者と区別すべきことを提唱している。また、生活の変化の表れとして住宅を捉えるという住宅史研究の視点を取り入れることにより、生活学や家政学、あるいは生活文化史学や風俗学といった隣接する他分野領域との研究交流を行い、それまでの建築学独自の様式論を主とする住宅史研究の閉鎖性を取り払い、住宅史研究を学際的な研究へと押し上げるなど、近代日本住宅史研究の発展に大きく寄与した研究であると考えている。次に、より具体的に、これまで発表してきた論文を通して、研究内容を紹介したい。

#### 2 本研究分野の概説ならびに研究内容の内容とその意義について

##### 2-1 研究分野の概説と研究論文の新規性について

私が研究を開始した時期の近代日本住宅史研究は、近代化の源として、わが国に建てられた居留地の外国人洋館やその影響を受けた上流層の洋館などのハイクラスの住宅を対象に、その様式や平面形式、設計者などを解明するものが大半を占めていた。その中にあって、木村徳国博士は中流層の都市独立住宅を対象とした研究（『日本近代都市独立住宅様式の成立と展開に関する史的研究』1958 年）を展開し、平井聖博士は日本住宅の通史の中で中流住宅に焦点を当てていた（『日本住宅の歴史』日本放送出版協会 1974 年）。また、計画分野では西山卯三博士も戦前戦後の中流層・下流層の住宅に視線を合わせ、その様相を紹介していた（『日本の住まいⅠ・Ⅱ・Ⅲ』勁草書房 1975-1980 年）。

こうした中で、私は住宅史研究こそ、“生活の変化”を基本とし

---

教授 建築学科

Professor, Dept. of Architecture, Dr.Eng.

て住まいの変化を捉える必要があるとし、中流層の近代住宅を中心とした木村徳国博士の研究姿勢に共感し、その研究姿勢を発展させようと試みた。具体的は、木村博士の研究は、住み手の理想とする住まい方を「生活思想」と規定し、その「生活思想」の反映したものととして住宅平面に注目し、明治から昭和初期に生み出された住宅形式として、明治期には「中廊下形住宅」、大正期には「居間中心形住宅」が誕生し、昭和初期をこれら二つの住宅形式の展開と融合の時期と捉えられることを示している。

これに対し、私は明治以降の住宅の変化を“洋風化”と捉え、わが国の伝統的生活の洋風化が始まり、それに伴い住宅も変化するという観点をもとに住宅の変化の過程を論じている。この新しい観点は、木村博士の注目した「生活思想」への視点を、「生活思想」形成に影響を与えた動きとして「洋風化」現象に捉え直し、洋風化による生活の変化から住宅の変化(洋風化)を捉えるというものである。すなわち、『広辞苑』などによれば、欧米からの影響は「文化」(精神的所産)と「文明」(技術的・物質的所産)に区別され、前者は「近代化」、後者は「洋風化」として捉えられていた。そのため、近代住宅史においても「洋風化」は表層的な欧米の影響として、「近代化」に焦点を据えることが方法論として定着していたのである。しかしながら、私は従来表層的とされてきたさまざまな「洋風化」現象が日常生活に深く浸透している今日、従来の「近代化」・「洋風化」の枠を取り去り、近代以降の住宅の変遷を「洋風化」から見直す実証的な基礎研究が必要であると考えたのである。

## 2-2 「洋風化」と軽視されていた現象を主役とした新たな近代日本住宅史の展開

### 2-2-1 「住宅改良会」に関する研究

研究の根幹に係わる「洋風化」現象を捉えるために、私は今日の住宅の祖形と考えられる中流層住宅が欧米の住宅様式・生活様式の影響を受けて大きく変化した大正・昭和初期に住宅改良運動を展開し、当時の住宅に大きな影響を与えた「住宅改良会」という民間団体に注目した。この「住宅改良会」の存在自体は既に知られていたものの、その活動は「洋風化」を意味するものとして軽視され、その実体はほとんど明らかにされてはいなかった。この「住宅改良会」の活動等に関して明らかにした主論文は、以下の3編である。

論文1: 「住宅改良会」の設立について 日本建築学会論文報告集第345号 昭和59年11月

論文2: 「住宅改良会」の沿革と事業内容について 日本建築学会論文報告集第351号 昭和60年5月

論文3: 住宅設計競技入選案から見た「住宅改良会」の住宅像について 日本建築学会論文報告集第358号 昭和60年12月

これらの論文で、これまで知られていなかった「住宅改良会」の全容を明らかにした。すなわち、論文1で住宅専門会社「あめりか

屋」社主の橋口信助と女子教育家の三角錫子を中心に大正5年(1916)に設立したこと、論文2でわが国最初期の住宅専門雑誌でもある『住宅』を機関誌として大正5年から昭和18年まで発行し続けたこと、社会に対して住宅への関心を維持するために住宅の設計競技を毎年のように実施し続けたこと、などを明らかにした。そして、論文3で住宅設計競技入選案から、以下のようにその特徴とその意味を論じている。

椅子坐式と床坐式という二つの起居様式から成る住宅の意匠を見ていくと、外部意匠は、外壁に注目すると大多数が大壁仕上げであることから「洋風住宅」と解され、「住宅改良会」の洋風志向の一貫性が窺われる。一方、窓の形式などに注目すると昭和3年から昭和8年を境に「和風」化が指摘できる。そして、この「和風」化により外観は、それまでの「純洋風」から「洋風」へと変化したとも考えられよう。・・・・・・(中略)・・・・・・入選案は、外観は「洋風」で内部は「洋室」と「和室」が混在した住宅である。このような住宅は、当初洋風志向の活動を展開していた「住宅改良会」が、わが国の伝統を見直す中で重要視した形式と考えられる。(論文3 p121)

上記の分析にあたっては、内部の諸室の「椅子坐式」「床坐式」、各部屋の床の仕様(板敷か畳敷か)、壁の仕様(大壁か真壁か)、天井の仕様(平天井か竿縁か)というように意匠に着目した新しい方法を取り入れている。そして、「住宅改良会」のめざした住宅は、内部は椅子坐式と床坐式が混在し、外観は洋風の住宅であることを明らかにしている。また、洋風住宅であるものの、昭和3-8年を境に、窓形式は洋風外観であっても引違い窓を用いるなどの「和風」化が見られることを指摘している。そして、こうした住宅形式は、従来提唱されてきた中廊下形住宅様式に代表されるような在来住宅を基本として欧米の影響を受けて生み出されたものとは異なり、直接欧米住宅を基本として徐々に「和風」要素を採り入れながら生み出されたものと考えられ、「洋風系独立住宅」と称すべきことを提案しているのである。

いずれにせよ、本研究成果のより、「住宅改良会」の活動はもちろんのこと、大正・昭和初期の「洋風化」を促した動きとしての住宅改良運動、さらには、生活改善同盟会を中心とする生活改善運動などの存在は、その後の近代日本住宅史では必ず触れられる存在として定着することとなった。

なお、この生活改善同盟会に関しては、以下の論文で紹介している。

論文4: 「住宅改良運動について」(編集責任・南博『近代庶民生活誌 6 食・住』pp.558-562 株式会社三一書房 1987年)

論文5:「大正・昭和初期の生活改善運動に関する一考察」(『生活文化史』NO.18 pp.20-32 日本生活文化史学会 1990年)

また、生活改善同盟会に関しては、共著として「大正8・9年に開催された文部省主催『生活改善展覧会』の開催経緯とその後の影響」(磯野さとみと共同『生活文化史』NO.28 pp.54-67 日本生活文化史学会 1995年)、「文部省外郭団体『生活改善同盟会』の設立経緯と設立活動の中心人物」(磯野さとみと共同『生活学論叢』Vol.2 pp.39-46 日本生活学会 1997年)がある。

このうち、論文4は、戦前期に展開された洋風化を推進させた住宅改良運動と生活改善運動について紹介したもので、「住宅改良会」が民間による組織であったのに対し、「生活改善同盟会」は文部省の外郭団体の官側による組織として活動していたことなどを紹介している。論文5は大正期に行われていた生活改善運動の官の系譜の動きとして文部省による生活改善運動の概要と、旧国立科学博物館所蔵資料の生活改善に関する「風刺画」の分析を通して当時の生活改善運動の具体的内容について紹介している。この「風刺画」は、大正期の生活運動の様子をビジュアルに伝える貴重な資料であり、以後、他の研究者も利用している。

## 2-2-2 「あめりか屋」に関する研究

私は、「住宅改良会」の役割やその意義の解明と合わせて、この「住宅改良会」の中心人物である橋口信助の興した住宅専門会社「あめりか屋」に関しても、その沿革、事業内容などについて明らかにした。この「あめりか屋」も、「住宅改良会」同様にアメリカ住宅の導入をめざしていた会社として知られつつも、その活動は「洋風化」として軽視され、その実体は不明なままだったのである。そこで、私は、日本建築学会大会梗概及び関東支部研究報告集に発表しているが、それらをまとめたのが以下の論文6(単行本)である。

論文6:『あめりか屋商品住宅―「洋風住宅」開拓史』(住まいの図書館出版局 1987年)

論文6では、創立者橋口信助の事績、当時の住宅改良運動の動向について、また、「あめりか屋」の手掛けた具体的な住宅作品の特徴を以下のように論じている。

あめりか屋は、あくまでも理想の実現化までの「過渡期としての住宅」として、アメリカ住宅の直写から一步後退した作品を創ることになる。それは、理想とするアメリカ住宅の中に伝統的な生活の場である「日本室」を取り入れるというもので、言い換えれば<西洋館の和風化>を行っていたことになる。しかしながら、いずれにせよ、これらの住宅は、当時、展開しつつあった住宅改良運動の中で、「改良住宅」とか「洋

風住宅」とかという言葉で表現されていたものだったのである。(論文6 p.196)

この論文6では、「あめりか屋」の住宅作品の特徴を、<西洋館の和風化>とし、「住宅改良会」のめざした住宅を具体的に推進していた中心的存在が「あめりか屋」であり、西洋館を原型に伝統的な住宅の要素を付加させることにより洋風住宅が誕生したとする新しい解釈を提示した。

## 2-3 近代日本住宅史研究の多様性を促す研究

### 2-3-1 日本の近代住宅の歴史を俯瞰する研究論文

私は、1992年に論文7(単行本)を発表し、「洋風化」という観点から戦前期のわが国住宅界の動向を俯瞰している。

論文7:『日本の近代住宅』(鹿島出版会 1992年、新版SD266 2016年)

論文7の新しい見解のひとつは、洋風化の始まりとしての明治初期に見られる上流層住宅の洋館建設について、その建設が行幸御殿としての設置を契機とするという解釈を提示している点である。以下、少し長いが引用したい。

明治五年三月に元長州藩主毛利家では、・・・洋館を建設し始め、翌六年に完成している。・・・ところで、この毛利元徳邸で注目されるのは、洋館建設早々の明治六年五月二七日に明治天皇の行幸を迎えていることである(日本史籍協会編『明治天皇行幸年表』)。この行幸とは、天皇が大名や他の公家の住宅や別荘を訪れることを指し、・・・お招きするにあたって専門の御殿を用意し、手厚く迎えたのである。

このような専門の御殿を用意して迎えるという江戸時代の行幸の在り方を考えれば、時代は明治に変わっても行幸の在り方は基本的には同じであったと想像されるのである。とすれば、毛利邸で建設した木造洋館は、天皇を迎えるための行幸用の御殿であったと考えても不自然ではない。時代が明治になり、その御殿は伝統的な建築ではなく洋館に変わったのである・・・(中略)・・・。

多木浩二は、天皇の洋服化の動きをとらえて「衣服が先行して変わっていくことは、しばしばたんに表層の風俗の出来事として理解されているが、本質的には政治的かつ知的な次元の変革の一部であった」と述べている。とすれば、何故に建築も欧米化していたかについてもおよその理解ができることになる。すなわち、繰り返すならば、かつて、例えば大名が天皇を迎えるために豪華な行幸御殿を建設したように、明治になると、政府高官や大富豪たちは行幸御殿として生活の場である伝統的な和館に並列させて本格的な洋館を建

設したのである。明治天皇は、今日の日本が歩んできた道をすでに予感していたかのように、明治初年に真っ先に断髪し、公式行事も儀式もすべて洋装による式で行うように変えていた。・・・洋装や椅子坐式の生活の場である洋館は、新しい時代の行幸御殿として必然的な建築形式であったのである。(論文7 pp.16-19)

明治初期の上流層の住宅形式を和洋館並列型住宅形式とし、この伝統的和館の横に洋館を配置する独特の形式が上流層の行幸御殿としての洋館建設を機に誕生したことを示唆したのである。このように洋館は、明治期においては政治的意図の中で積極的に建設されたのである。それゆえ、ステータスとしての意味を持ち合わせ、権力の象徴、身分や資力の象徴として洋風化が推し進められたのである。

大正期になると、洋風化は広く浸透して中流層の住宅でも展開されることになるが、それは権力の象徴としての意味に代わって、新しい時代にふさわしい形式として普及していくことになる。一方、この頃になると建築家たちは、欧米の住宅形式をそのまま取り入れる動きに疑問を持ち始め、わが国の伝統的住宅や生活形式との融合化を模索し、独自の新しい住宅形式を試みていくことになる。ここでは、当時の建築家たちの試みから注目すべきものを取り上げ、紹介している。具体的には、保岡勝也・山本拙郎・遠藤新・藤井厚二・山田醇・吉田五十八の6名であり、それまでの住宅史研究では取り上げられたことのなかった建築家たちも含まれるなど、住宅史研究の新たな展開を示している。例えば、「あめりか屋」技師であった山本拙郎は、わが国にふさわしい洋風化された住宅として「真壁式洋風住宅」を提案している。具体的には、山本は日本の伝統建築の形式である真壁構法は、わが国の気候風土の中で生まれたものであり、その形式は継承すべきという姿勢を打ち出した。その住宅は、以下のようなものだったのである。

一見アメリカン・バンガローに見えながら、実は窓の形式は在来の引き違い窓で、室内の壁の仕様も在来の柱の見える真壁であることからわかるように、伝統的住宅の形式を積極的に採用したまさしく＜洋風＞の住宅であったのである。(論文7 p.164)

建築家たちの提案は、和洋の要素をどのように融合化していくのかの提案であり、とりわけ、真壁=和風、大壁=洋風という形式を如何に脱却するかが大きなテーマであった。こうしたテーマにひとつの答えを打ち出したのが吉田五十八であった。

吉田は、・・・＜大壁＞というものを肯定的に導入することを考えた。・・・大壁を導入することを考えた吉田は、さらに、大壁による新たな展開を考えた。すなわち、吉田にとっ

て伝統的構法である真壁造りは、すべての柱がいやがおうでも見えるため、見せたくない柱まで見せなければならないし、しかも、構造材であるため自由に動かすこともできないという制約のある構法と考えられたのである。そのため、全体を大壁として見せたい柱だけを自由に配置し、他は全て壁の中に埋めてしまうことを思いついたのである。吉田は、昭和一〇年(一九三五)、この＜大壁＞による数寄屋の成立過程を「近代数寄屋住宅と明朗性」と題して高らかに発表している。(論文7 pp.27-228)

吉田は、椅子坐と床坐の起居様式の融合化の中で、建築そのものの表現を伝統的な真壁造と大壁造の融合化により、伝統的な数寄屋住宅を超えた近代数寄屋住宅を誕生させたのである。吉田が近代数寄屋住宅を生み出したことは知られていたが、それは偶然の産物ではなく、当時の建築家たちの様々な提案の影響を受ける中で初めて生まれたものであったのである。このように洋風化という観点を通して、多くの新しい住宅の新たな位置づけが可能となったのであった。

いずれにせよ、終章では、こうした洋風化という観点を通して、明治以降に住宅の中でどのような試みが行われたのかを壁の仕様と床の仕様を基にダイアグラム化して提示し、わが国の住宅の変容を一望するシステムを私論「日本の近代住宅の系譜」として論じている。こうした試みは、今後の住宅史研究の発展に大いに寄与するものと考えている。

## 2-3-2 多様な近代日本住宅に関する史的研究論文

### ① 郊外住宅・郊外住宅地に関する研究

近代日本住宅史研究として住宅の研究を進める中で、当然ながら戦前期の住宅遺構調査なども行った。そうした中で、都市郊外に開発された計画的住宅地研究などの必要性も認識された。そうした研究の代表的なものが、以下のものである。

論文8:「『城南田園住宅組合』住宅について」(山口廣編『郊外住宅地の系譜』pp.207-220 鹿島出版会 1987年)

論文9:「ひばりが丘南澤学園町 『婦人之友』が生んだ学園町ー自由学園を中心とした南澤学園町の成立」(片木篤・藤谷陽悦・角野幸博編『近代日本の郊外住宅地』pp.155-172 鹿島出版会 2000年)

論文10:「同潤会の郊外住宅地開発ー普通住宅事業の候補地からみた旧東京市郊外の住宅地形成」(鈴木博之他編『近代とは何か』シリーズ 都市・建築・歴史 7pp.245-286 東京大学出版会 2005年)

論文8は、東京練馬に現存する住宅地である旧城南田園住宅組合が、組合員を募り、郊外の敷地を借りて、独自の田園生活をめざ



した理想的な住宅地開発を行ったもので、その開設経緯と住宅遺構の調査内容をまとめたものである。論文9も、『婦人之友』創立者の羽仁夫妻が新しい教育の場として創設した自由学園とその資金を獲得するために開設した学園町の開発の経緯とその住宅について報告したものである。論文10は、同潤会が関東大震災後に郊外に住宅地開発をめざして事業を行うにあたって行った敷地調査の資料を整理し、そのめざした住宅地についてまとめたものである。こうした郊外化の研究は、その後多くの成果が見られるが、そうした研究の走りといえよう。

## ② アメリカ住宅の影響に関する研究

私は、日本住宅の洋風化現象を追求する傍ら、戦前期のわが国の中流住宅に最も強い影響を与えた欧米住宅としてアメリカ住宅に注目した研究も行っている。その一つが以下のものである。

論文11:「あめりか屋」店主橋口信助の輸入した「組立住宅」について 日本建築学会大会学術梗概集 (関東) 1988年10月

論文12: 大正期における米国製組立住宅の導入について 日本建築学会大会学術梗概集 (関東) 1993年9月

論文11, 12をもとに、私は共同研究として、わが国の住宅の“洋風化”にあたっての影響を与えた外国の住宅として、大正期以降はアメリカ住宅がわが国のモデルであったことを明らかにしている。すなわち、「わが国近代独立住宅の変遷過程における米国住宅の影響について—わが国に輸入された米国住宅の動向を中心に—」(『研究年報』NO.23 pp.167-176 住宅総合研究財団 1996年)では、戦前期に輸入された米国住宅を取り上げ、その分析をもとに当時の住宅の関心の様相を明らかにしている。また、中嶋直子との共著論文「わが国戦前期の都市独立住宅における外部意匠の変容過程に関する一考察—『あめりか屋』の住宅作品の外部意匠を中心に—」(『日本建築学会計画系論文集』第599号 pp.181-188 2006年1月)では、外部意匠の分析から、当時の洋風住宅づくりを牽引していた「あめりか屋」の作品が、明治末から大正期はアメリカの「バンガロー様式」、大正後期からはアメリカの「スパニッシュ様式」の影響を受けた住宅を手掛けていたことを明らかにし、ともにアメリカから持ち込まれた住宅様式をもとにした住宅であったことを論じている。こうした当時の海外からの影響関係を捉える研究は、近年、盛んに行われており、上記の研究はそうした研究の走りといえよう。

## ③ 住宅作家・住宅論に関する研究

私は、洋風化研究を進める中で、建築家たちがどのような住宅をめざしていたのかの住宅作家・住宅論研究も展開している。すなわち、内田は戦前期の重要な単行本を編者兼解題者として選択し、多くの研究者の協力を得て復刻している。具体的には、戦前期の住宅史研究にとって貴重であり、当時の住宅界に大きな影響を与えたと

考えられる住宅系単行本を27冊選択し、『住宅建築文献集成』(第1期-第4期 計27巻 2009年-2014年 柏書房)として復刻している。この中で私が解題を担当したものが、以下のものである。

論文13:「住宅作家・山本拙郎の自由主義的住宅観について」(内田青蔵編『住宅建築文献集成』第5巻 pp.383-405 2009年 柏書房)

論文14:「“住宅作家”の先駆者・保岡勝也」(内田青蔵編『住宅建築文献集成』第9巻 pp.619-643 2010年 柏書房)

論文15:「健康的な“日本近代民家”の創出をめざした山田醇」(内田青蔵編『住宅建築文献集成』第18巻 pp.771-793 2011年 柏書房)

論文16:「わが国に持家を普及させようとした平尾善保の住宅論」(内田青蔵編『住宅建築文献集成』第27巻 pp.663-678 2013年 柏書房)

論文13・14・15の山本拙郎、保岡勝也、山田醇の3名は、論文7で既に取り上げた住宅作家達である。彼らの事績を、その後明らかになったことを含めより詳細に論じている。一方、論文16は、昭和恐慌後の住宅不足期に日本電話建物株式会社を組織し、中流層以下の人々を対象に持家を取得できることを謳い文句に住宅事業を展開した平尾善保の住宅に関する考え方をまとめたものである。明治末期以降、わが国では住宅関連の単行本の発行が急増した。そうした中で、独自の住宅論を展開している建築家などが散見される。こうした住宅論研究や住宅作家論研究は、今後、益々注目されるものと考えられる。

## ④ 住宅各部に関する史的研究

私の住宅史研究の姿勢が「洋風化」現象に捉え直し、洋風化による生活の変化から住宅の変化(洋風化)を捉えるという考え方を重視することは既に紹介した。こうした見方は、必然的に住宅の各部を分解しながら子細に検討する複眼的視点の存在を意味する。具体的には、住宅の機能や諸室を分解して見るという研究方法を意味している。こうした方法によるものとして以下の論文がある。

論文17:「戦前期におけるキッチンセットの成立と展開—鈴木式高等炊事台を中心として」(日本生活学会編『台所の100年』pp.187-214 ドメス出版 1999年)

論文18:「ダイニングキッチン(DK)誕生前史—わが国戦前期の住宅にみられる台所と食事の場の一体化の過程に関する一考察」(日本生活学会編『台所の100年』pp.215-239 ドメス出版 1999年)

論文19:「『玄関』から見た明治以降の住宅の洋風化に関する一考察—戦前期刊行の建築系関連書籍を主資料として」(神奈川大学日本常民文化研究所編『歴史と民俗』NO.32

pp.255-287 2016年2月)

論文17・18は日本生活学会編『生活学』第23冊として出版されたものである。2編共に、台所の変容過程を論じたものである。住宅の変化は、すべての部分が一樣に変化するわけではない。その変化の様子は、部分々々によって異なる。今後は、こうした部位に分け、それらがどのような変化の過程を示しているのか、その変化の意味は何かといった解析が求められるであろう。論文19は、玄關に注目し、伝統的な生活スタイルである靴を脱ぐという行為の場がどのように継承されてきたのかを論じたものである。

なお、こうした視点で私は『「間取り」で楽しむ住宅読本』(光文社新書 光文社 2005年)をまとめている。いずれにせよ、こうした住宅の部位に注目した分析は、今後も行われるであろうし、そうした研究を通して洋風化現象の解釈も一層進むものと考えている。

#### ⑤ その他

戦前期の住宅の動向を探る研究として、他に以下のような研究を行った。

論文20:「建築学会の活動からみた大正11年開催の平和記念東京博覧会文化村に関する一考察」日本建築学会計画系論文集 第529号、pp263-270 2000年3月

論文21:「借家から持家へー所有形態からみた戦前・戦後の住まいの変容」(日本生活学会編『住まいの100年』pp.37-61 ドメス出版 2002年)

論文20は、大正11年に開催された平和記念東京博覧会会場に設けられた住宅展示場に関する論文である。開催1年前には住宅組合法が公布され、建築学会では、そのモデルハウスとしての意味を含め、積極的に住宅展示を推し進めたこと、アメリカのツーバイフォー工法を採用した住宅が複数出品されたこと、「文化住宅」の呼称がこの展覧会を機に流行したことなどを明らかにした。また、論文21は、わが国の住宅の所有形態は、戦前期は圧倒的に借家形式であったものが、大正10年公布の住宅組合法の影響もあって、昭和期に入るとわずかながらも持家が増加していること、戦後直後になると持家を強いられ、急速に所有形態が変化することを明らかにしている。なお、この住宅組合法に関しては、藤谷陽悦博士との共同研究において、住宅組合法の公布の経緯とその実体状況を明らかにしている。

#### 3 むすびにかえてー日本建築学会賞(論文)としての価値ー

私の近代日本住宅史に関する一連の研究概要を紹介してきた。改めて、その近代日本住宅史研究への貢献した点を整理すれば、「洋風化」と軽視されていた現象を主役とした新たな近代日本住宅史研究の展開であり、洋風化による生活の変化から住宅の変化(洋風化)

を捉えるという住宅史研究の姿勢の導入といえるであろう。特に、近代住宅を洋風化による生活の変化から捉える視線は、隣接する生活学や生活文化史、あるいは風俗史といった様々な隣接する多様な研究領域との研究交流を可能とするもので、これまでの建築学固有の様式論の閉鎖感を取り去り、開かれた研究領域としての住宅史研究の可能性を切り開いたといえるであろう。この点は、私の研究論文が、日本生活学会や日本生活文化史学会の機関誌に報告されたものであることが証明しているのである。

また、今後の発展さらには研究の影響・波及効果としては、近代日本住宅史研究の多様性を促し、また具体的な多様な研究方法を提示したこと、といえるであろう。

加えて、私の研究への貢献としては、研究成果を一般読者向けにまとめ、平易な文章による単行本として出版したことも指摘できると考えている。論文6、論文7もこの範疇のものともいえるし、『「間取り」で楽しむ住宅読本』(光文社新書 光文社 2005年)の他に、『同潤会に学べる住まいの思想とそのデザイン』(2004年 王国社)、そして『お屋敷拝見』(2003年 河出書房新社)、『お屋敷散歩』(2011年 河出書房新社)なども挙げられる。これらは、研究の社会還元であり社会的貢献といえる。こうした社会還元の成果は、研究への一般人の関心に加え、歴史的建造物への関心や保存・再生などへの関心の高まりという波及効果をもたらしているといえると自負している。